

大学生の読書の変化*

—2006年調査と2012年調査の比較より—

東京家政大学 平山 祐一郎**

目的

大学生の読書実態を調査する意義は少なくとも3つある。

1つめは、小学校や中学校、高等学校において、熱心な読書教育が行われているが、その効果が大学生において持続しているか否かを確認することである。2つめは、大学生の読書実態を調査した結果は、大学生の学習活動や知的活動の一面を反映しているため、大学教育に携わる者が、教育の内容や授業の方法を検討する上で、判断材料の1つになる。3つめは、やや過大な表現を用いれば、歴史的な資料を残すことである。今、紙の本（アナログ）から電子書籍（デジタル）への移行が始まっている。その過渡的時代を生きる大学生の読書実態を調査し、記録を残すことは、読書やリテラシーの歴史の変遷に後述に語ることに役立つ。

そこで、大学生の読書実態に関して、比較的大きな規模の調査を、時を空けて2回実施し（2006年と2012年）、その結果を吟味・検討する。そのことで、大学生の読書の変化を捉えた一資料を提供することが本研究の目的である。

方法

本研究では2006年と2012年に行われた調査結果を比較する。前者を2006年調査、後者を2012年調査と呼ぶ。なお、2006年調査の結果の詳細については、平山（2008）に報告されている。

【調査時期】2006年調査は2006年6月に実施し、2012年調査は2012年6月に実施した。

【調査対象】2006年調査は、東北・関東・中国地方の5大学・1短期大学の大学生1184名、2012年調査は、北海道・東北・関東・東海・関西・中国・沖縄の11大学の大学生2169名であった。

【質問紙】回答者が数値を書き込む「数値記入項目」と回答者が数値を評定する「数値評定項目」からなる質問紙を用いた。質問項目は表1・表2・表3に記載されているものである。なお、評定は全て6段階評定で、「まったくあてはまらない」あるいは「まったくそう思わない」を1とし、「非常にあてはまる」あるいは「非常にそう思う」を6とする6段階評定を用いた。

【調査手続き】調査の実施（質問紙の配付・実施・回収など）は、各大学の教員に依頼した。「このアンケートは『読書』に関するものです。教育や研究にとって非常に重要な調査です。回答結果は全て数値化され、統計的処理をしますので、回答者が特定されることはありません。また、この結果は学会発表や報告書、あるいは論文にて公表し、教育や研究に役立てる予定です。強制的な調査ではありません。ぜひ回答をしていただき、ご提出いただければ幸いです。」という教示を行った。また、「『読書』や『本』という場合、マンガや雑誌、教科書は除いて考えてください。」と指示した。

* A Comparison of Book Reading of University Students Between 2006 and 2012

** HIRAYAMA, Yuichiro (Tokyo Kasei University)

表1 平山（2008）の読書動機の因子分析結果（2006年調査，N=1037）

番号	質問項目	第I因子 娯楽休養	第II因子 錬磨形成	第III因子 言語技能	第IV因子 影響触発
B17	私が本を読むのは、リラックスするためだ。	.82	-.05	-.01	.06
B1	私が本を読むのは、のんびりくつろぎたいからだ。	.78	-.10	.03	.04
B23	私が本を読むのは、本の世界が好きだからだ。	.72	.09	-.04	-.11
B13	私が本を読むのは、読書を楽しみたいからだ。	.70	-.02	.03	-.09
B8	私が本を読むのは、気分転換をするためだ。	.70	.02	.01	.05
B25	私が本を読むのは、あれこれと想像することが好きだからだ。	.57	.16	-.02	.03
B19	私が本を読むのは、自分自身についてあれこれ考えを深めるためだ。	.00	.92	-.06	-.06
B26	私が本を読むのは、自分を見つめなおすためだ。	.04	.90	-.13	.08
B22	私が本を読むのは、人間として成長したいからだ。	.01	.75	.14	-.04
B29	私が本を読むのは、自分の悩みの解決に役立てたいからだ。	.00	.69	-.01	.11
B4	私が本を読むのは、いろいろな考え方を知るためだ。	-.01	.59	.23	-.10
B14	私が本を読むのは、読解力をつけるためだ。	-.01	-.04	.88	.01
B11	私が本を読むのは、漢字の読み書きに強くなりたいからだ。	.03	-.11	.73	.15
B5	私が本を読むのは、文章の書き方を学ぶためだ。	.00	.09	.72	-.08
B30	私が本を読むのは、語い(ボキャブラリー)を豊かにするためだ。	.01	.20	.64	.00
B16	私が本を読むのは、(その本が)世間で評判になっているからだ。	.05	.01	-.06	.86
B10	私が本を読むのは、(その本が)友達の間で話題になっているからだ。	-.01	.02	-.01	.84
B7	私が本を読むのは、(その本が)話題になっているからだ。	.01	.00	-.06	.79
B66	私が本を読むのは、(その本を)まわりの人が読んでいるからだ。	-.06	-.04	.04	.75
B27	私が本を読むのは、(その本を)友達が熱心に読んでいるからだ。	-.03	.13	.08	.69
B20	私が本を読むのは、ひとからすすめられるからだ。	-.06	.09	.05	.69
B2	私が本を読むのは、(その本が)映画やドラマの原作だからだ。	.08	-.17	.06	.57

表2 平山（2008）の読書時間帯の因子分析結果（2006年調査，N=1037）

番号	質問項目	ゆとり時間 読書因子 (第I因子)	すき間時間 読書因子 (第II因子)
B64	ゆっくり過ごせるゆとりのある時間に本を読むことがある。	.88	-.02
B46	長い休み(夏休みや冬休み, 春休みなど)にゆっくりと本を読むことがある。	.83	-.06
B50	休日にゆっくりと読書することがある。	.80	.06
B54	ゆっくりと長い時間をかけて、本を読むことが楽しい。	.80	-.07
B38	もし時間がたくさんあれば、本に使う。	.66	.11
B58	寝る前にゆっくり読書することがある。	.65	.07
B35	いったん本を読み始めたら、しばらく読み続ける。	.62	-.06
B59	電車やバスを待っている時に、本を読むことがある。	-.09	.87
B55	外出(大学に行くなど)するときには、本を持っていく。	.05	.78
B44	立ったまま本を読むことがある。	-.12	.73
B41	ちょっとしたひまな時間に本を読むことがある。	.19	.67
B47	休講などで突然に出来たひまな時間に、本を読むことがある。	.22	.58
B31	授業の休み時間に本を読むことがある。	.09	.57
B40	本を読む場所を選ばない。	-.07	.53

表3 数値記入項目の統計量(平均値・標準偏差・中央値)

質問項目	2006年調査			2012年調査			2006年と2012年の合計		
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
Q 1 1週間の読書日数	1.69	2.05	1	1.21	1.78	0	1.38	1.90	0
Q 2 1日の読書時間(分)	24.86	35.67	10	19.86	30.91	0	21.67	32.80	3
Q 3 5月の読書冊数	2.09	3.22	1	1.95	3.86	1	2.00	3.64	1
Q 4 1日の携帯電話使用時間(分)	110.03	168.18	60	143.61	162.70	120	131.43	165.47	80
Q 5 1日のテレビ視聴時間(分)	114.84	88.57	120	83.46	82.60	60	94.85	86.13	60
Q 6 1日のパソコン使用時間(分)	49.71	63.00	30	69.57	87.86	30	62.37	80.30	30

結果

(1) 分析対象について

回収された質問紙から、分析のためのデータファイルを作成するにあたって、1) 欠損値が1つでもあるもの、2) 1つの回答が求められているにもかかわらず、複数の回答がなされているもの、3) 回答表現が不適切なもの(数字による回答が求められているにもかかわらず、言葉で表現しているものなど)を除外した。その結果、2006年調査では1037名、2012年調査では1822名が分析対象となった。

(2) 不読率の算出

1カ月に1冊も本を読まない人を不読者と呼ぶ。そして、不読率とは調査対象者全体に占める不読者の割合である。

2006年調査と2012年調査においては、「5月の読書冊数」(表3のQ3)を用いた。0冊と回答した大学生は、前者で33.6%(1037名中348名)、後で40.1%(1822名中731名)であった。

(3) 「読書動機」の確認的因子分析

2006年調査のデータから、探索的因子分析により、大学生の読書動機について、表1のような因子が見出されている(平山, 2008, p.156)。「娯楽休養」「錬磨形成」「言語技能」「影響触発」の4つの読書動機因子である。今回、2006年調査と2012年調査を合わせた計2859名のデータによる確認的因子分析により、この4つの因子を検証した。

その結果、図1のようなパス図が得られた。この分析結果(適合指標)は、GFI=.855, AGFI=.820, CFI=.888, RMSEA=.086であった。よって、この4因子は、ほぼ確認されたといつてよいだろう。

(4) 「読書時間帯」の確認的因子分析

2006年調査のデータから、探索的因子分析により、大学生の読書時間帯について、表2のような因子が見出されている(平山, 2008, p.161)。「ゆとり時間」「すき間時間」の2つの読書時間帯因子である。今回、2006年調査と2012年調査を合わせた計2859名のデータによる確認的因子分析により、この2つの因子を検証した。その結果、図2のようなパス図が得られた。この分析結果(適合指標)は、GFI=.928, AGFI=.900, CFI=.942, RMSEA=.079であった。よって、この2因子は、確認されたといつてよいだろう。

(5) 2006年調査と2012年調査の比較

各質問項目の平均値・標準偏差・中央値を、「数値記入項目」については表3、「数値評定項目」については表4に示した。なお、表4については、各因子を構成する質問項目の合計得点に関しても表示した。

① 「数値記入項目」における比較

表3を見ると、Q5を除き、平均値より標準偏差の方が大きい。Q5の標準偏差も平均値に対して、その値がかなり大きい。そこで2006年調査と2012年調査の比較を行うにあたり、ノンパラメトリックな分析方法を用いた。質問ごとに、中央値より大きな値をとる度数と中央値以

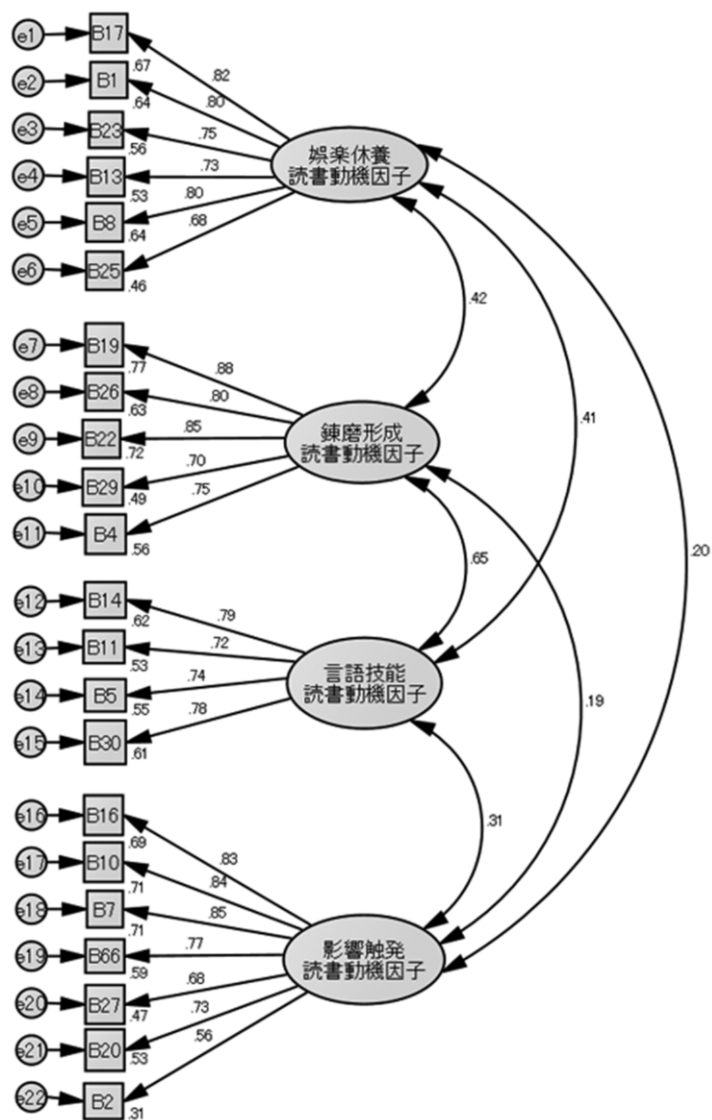


図1 2006年調査と2012年調査を合わせた4因子の確認的因子分析結果

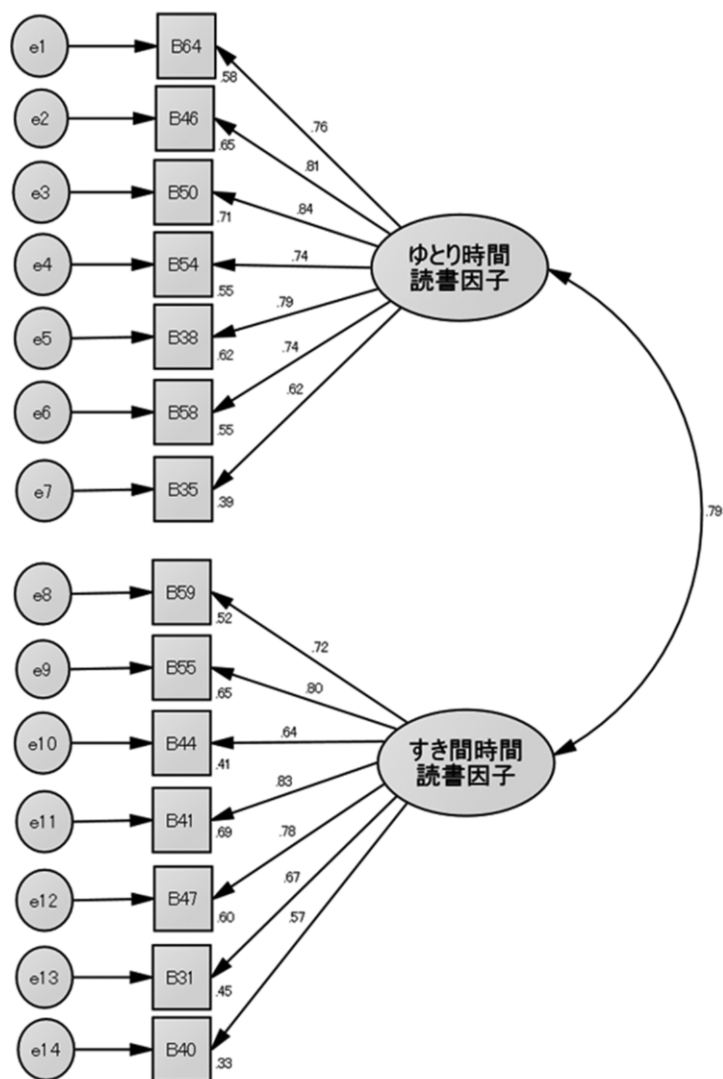


図2 2006年調査と2012年調査を合わせた2因子の確認的因子分析結果

下の度数に分け、 χ^2 乗検定及び残差分析を行った(表5)。

その結果、度数からみて、Q1「1週間の読書日数」は2006年に比べ、2012年が減っている。Q2「1日の読書時間」も同様である。Q1やQ2に比べて顕著ではないが、Q3「5月の読書冊数」も2006年に比べ、2012年にかけて減る傾向がみてとれる。

Q4「1日の携帯電話使用時間(分)」は2006年に比べ、

2012年が増えている。一方、Q5「1日のテレビ視聴時間(分)」は2006年に比べ、2012年が減っている。Q6「1日のパソコン使用時間」は2006年に比べ、2012年が増えている。

② 「数値評定項目」における比較：「読書動機」について

読書動機の各因子を構成する質問項目の信頼性統計量

表4 数値評定項目とその合計得点の統計量（平均値・標準偏差・中央値）

「娯楽休養」読書動機									
	2006年調査			2012年調査			2006年と2012年の合計		
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
B17	3.31	1.47	3	3.44	1.51	4	3.39	1.50	3
B1	3.34	1.43	3	3.55	1.58	4	3.47	1.53	4
B23	4.04	1.56	4	3.75	1.64	4	3.86	1.62	4
B13	4.52	1.49	5	4.30	1.54	5	4.38	1.53	5
B8	3.57	1.48	4	3.70	1.51	4	3.66	1.50	4
B25	4.12	1.48	4	3.92	1.53	4	3.99	1.51	4
合計得点	22.90	6.92	24	22.66	7.70	23	22.75	7.43	24
「錬磨形成」読書動機									
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
B19	3.72	1.52	4	3.39	1.54	3	3.51	1.54	4
B26	3.27	1.45	3	3.00	1.47	3	3.10	1.47	3
B22	3.79	1.49	4	3.48	1.56	4	3.59	1.54	4
B29	3.03	1.47	3	2.91	1.50	3	2.96	1.49	3
B4	3.99	1.43	4	4.01	1.48	4	4.00	1.46	4
合計得点	17.80	6.18	18	16.79	6.32	17	17.16	6.29	17
「言語技能」読書動機									
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
B14	3.07	1.40	3	3.42	1.48	4	3.29	1.46	3
B11	2.30	1.23	2	2.42	1.32	2	2.38	1.29	2
B5	2.75	1.35	3	2.73	1.43	3	2.73	1.40	3
B30	3.30	1.45	3	3.52	1.50	4	3.44	1.49	4
合計得点	11.42	4.53	11	12.09	4.73	12	11.85	4.67	12
「影響触発」読書動機									
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
B16	3.21	1.46	3	3.10	1.46	3	3.14	1.46	3
B10	2.85	1.42	3	2.50	1.35	2	2.63	1.39	2
B7	3.33	1.50	4	2.95	1.47	3	3.09	1.49	3
B66	2.24	1.23	2	2.37	1.32	2	2.32	1.29	2
B27	2.36	1.21	2	2.22	1.25	2	2.27	1.24	2
B20	2.77	1.30	3	2.77	1.40	3	2.77	1.36	3
B2	2.87	1.46	3	3.00	1.48	3	2.96	1.47	3
合計得点	19.62	7.54	20	18.90	7.76	19	19.16	7.68	19
「ゆとり時間」読書									
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
B64	3.71	1.61	4	4.10	1.60	4	3.95	1.61	4
B46	4.20	1.60	4	3.47	1.74	4	3.74	1.72	4
B50	3.21	1.65	3	2.94	1.59	3	3.04	1.62	3
B54	3.82	1.51	4	3.45	1.65	4	3.58	1.61	4
B38	3.18	1.49	3	2.96	1.46	3	3.04	1.48	3
B58	3.33	1.64	3	2.95	1.60	3	3.09	1.63	3
B35	4.62	1.41	5	4.36	1.56	5	4.45	1.52	5
合計得点	26.06	8.63	27	24.24	9.01	25	24.90	8.92	25
「すき間時間」読書									
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
B59	3.51	1.79	4	3.10	1.80	3	3.25	1.80	3
B55	3.13	1.74	3	2.78	1.76	2	2.91	1.76	3
B44	3.47	1.78	4	3.11	1.75	3	3.24	1.77	3
B41	3.72	1.61	4	3.12	1.61	3	3.34	1.63	3
B47	2.98	1.67	3	2.65	1.62	2	2.77	1.64	2
B31	2.55	1.52	2	2.29	1.48	2	2.38	1.50	2
B40	3.69	1.51	4	3.12	1.65	3	3.33	1.62	3
合計得点	23.06	8.76	23	20.17	8.98	19	21.22	9.01	21

表5 中央値で分けられた度数と χ^2 乗検定の結果

		> 中央値	<= 中央値
Q 1 1週間の読書日数 χ^2 乗値(自由度1) 35.623**	2006年調査	589 [6.007**]	448 [-6.007**]
	2012年調査	822 [-6.007**]	1000 [6.007**]
Q 2 1日の読書時間(分) χ^2 乗値(自由度1) 37.340**	2006年調査	597 [6.150**]	440 [-6.150**]
	2012年調査	831 [-6.150**]	991 [6.150**]
Q 3 5月の読書冊数 χ^2 乗値(自由度1) 3.131+	2006年調査	437 [1.809+]	600 [-1.809+]
	2012年調査	705 [-1.809+]	1117 [1.809+]
Q 4 1日の携帯電話使用時間(分) χ^2 乗値(自由度1) 113.784**	2006年調査	376 [-10.706**]	661 [10.706**]
	2012年調査	1040 [10.706**]	782 [-10.706**]
Q 5 1日のテレビ視聴時間(分) χ^2 乗値(自由度1) 83.841**	2006年調査	604 [9.195**]	433 [-9.195**]
	2012年調査	736 [-9.195**]	1086 [9.195**]
Q 6 1日のパソコン使用時間(分) χ^2 乗値(自由度1) 26.258**	2006年調査	404 [-5.163**]	633 [5.163**]
	2012年調査	892 [5.163**]	930 [-5.163**]

※ [] 内は調整された残差。また検定結果は, +: .05 < p < .10, *: p < .05, **: p < .01と表示。

(Cronbachのアルファ係数)を求めた。「娯楽休養」読書動機の6項目では、.89であった。「錬磨形成」読書動機の4項目では、.90であった。「言語技能」読書動機の4項目では、.85であった。「影響触発」読書動機の7項目では、.90であった。因子ごとに質問項目の合計得点を求めるにあたり、これら4つの信頼性統計量の値はほぼ十分な高さがあると判断した。よって、2006年調査と2012年調査を独立変数とし、各因子の合計得点を従属変数として、分散分析を行った。

その結果、「娯楽休養」読書動機合計得点は、2006年調査と2012年調査の間に有意な差は見られなかった ($F(1,2857) = .663$)。「錬磨形成」読書動機合計得点は、2006年と2012年調査の間に1%水準で有意な差が見られ ($F(1,2857) = 16.99$)、2012年が低かった。「言語技能」読書

動機合計得点は、2006年と2012年調査の間に1%水準で有意な差が見られ ($F(1,2857) = 13.72$)、2012年が高かった。「影響触発」読書動機合計得点は、2006年と2012年調査の間に5%水準で有意な差が見られ ($F(1,2857) = 5.80$)、2012年が低かった。

③ 「数値評定項目」における比較：「読書時間帯」について

読書時間帯の各因子を構成する質問項目の信頼性統計量(Cronbachのアルファ係数)を求めた。「ゆとり時間」読書の7項目では、.90であった。「すき間時間」読書の7項目では、.88であった。因子ごとに質問項目の合計得点を求めるにあたり、これら2つの信頼性統計量の値はほぼ十分な高さがあると判断した。よって、2006年調査と

2012年調査を独立変数とし、各因子の合計得点を従属変数として、分散分析を行った。

その結果、「ゆとり時間」読書合計得点および「すき間時間」読書合計得点に1%水準で有意な差が見られた(前者： $F(1,2857)=27.94$ ，後者： $F(1,2857)=69.49$)。2つの合計得点はともに2012年調査が低かった。

考察

(1) 不読率について

不読率はある集団における読書離れの状況を端的に示すものなので、読書離れの変化を把握する際に重要な指標である。過去の調査を見てみると、大学生協連読書調査委員会の1987年の調査(2123名対象)では13.1%、1990年の調査(1430名対象)では13.4%であった。大阪教育大学生涯教育計画論研究室・大阪教育大学附属図書館の2000年の調査(1313名対象)では26.4%であった。

なお、今回の調査結果を付加してみると、1987年は13.1%、1990年は13.4%、2000年は26.4%、2006年は33.6%、2012年は40.1%となった。1987年から1990年にかけては、1年に0.1%ずつの微増である。その後、1990年から2000年の10年を経てほぼ2倍となった。年約1%の増加である。その後も同程度の増加をし、2012年には40%を超えた。

当然のことながら、この4つの調査では、調査対象や調査方法が異なるため、断定的に結論付けることはできないが、この不読率の推移からみて、大学生は年々、読書離れの傾向にあるといえよう。

(2) 読書動機について

2006年調査のデータによる探索的因子分析の結果が、2006年調査と2012年調査のデータを合わせた確認的因子分析により検証された。見出された因子とそれを構成する質問項目が同じであることが確認された。

しかし、当然のことではあるが、因子分析によって見出される因子は、あくまでも質問紙作成者が予測し、留意した内容に過ぎないため、2006年調査のために作られ

た質問紙で想定できなかった読書動機の存在は否定できない。また、2006年と2012年の6年の間に新たな読書動機が生じた可能性もあるかもしれない。特に、読書はデジタル化・インターネット化の影響を強く受け始めているので、今までの読書動機の変容や新しく生まれた読書動機については、今後留意しておく必要がある。確認的因子分析で検証されたとはいえ、この4因子だけにこだわらない読書動機に関する研究態度が求められるだろう。

(3) 読書時間帯について

「読書動機」と同様に、2006年調査のデータによる探索的因子分析の結果が、2006年調査と2012年調査のデータを合わせた確認的因子分析により検証された。見出された因子とそれを構成する質問項目が同じであることが確認された。

ただし、大学生の経済状況の悪化などにより、アルバイト時間等が増加すると、大学生の自由時間が減少に向かう。そうすれば、おのずと「ゆとり時間」読書も「すき間時間」読書も縮小するだろう。したがって、今後の大学生の読書調査は、大学生の「可処分」時間の量や過ごし方を捉えていかなければならないだろう。

(4) 2006年調査と2012年調査の比較

① 「数値記入項目」における比較

先に述べたように、2006年調査よりも2012年調査の不読率が高くなっていた。したがって、2012年調査の「1週間の読書日数」「1日の読書時間」および「5月の読書冊数」が2006年調査よりも減っていたという分析結果(表5)は至って当然である。

また、かつて読書の最大のライバルであったテレビの視聴が減っている。携帯電話やパソコンの使用が増えているのが、この時代の変化をよく反映している。大学生の読書の時間を奪う主役が、テレビから携帯電話・パソコンに移行したものと考えられる。しかし、ひとことで携帯電話やパソコンといっても、それらを通じて様々な

ことをすることができる。そのため、携帯電話やパソコンのどのような機能に、大学生は時間を割いているのかを把握できなければ、読書がどんな活動に代替されたのかを知ることができない。その機能の中には、当然、電子書籍の読書も含まれるだろう。電子書籍の読書と紙の本の読書が同等のものであるか否かの議論は単純ではないが、もし、携帯電話やスマートフォン、パソコン上において電子書籍の読書が増えていくようであるならば、それも含めて、今後の読書調査には、こうした点への工夫や配慮が求められるだろう。

② 「数値評定項目」における比較：「読書動機」について

自ら本を読もうとするときの最も自然な動機は、生活の中で楽しみや時間を作ったり、日常からの息抜きをしたりすることにあるだろう。したがって、たとえ本を読まない人であっても、子どものころに絵本や児童書を読んだ経験があれば、娯楽休養に関する質問項目に否定的な評定をすることはないだろう。その結果、この動機の合計得点の差が生じなかったと見られる。

一方で、読書は教養主義とも深く関係しており、読書という行為には自らの知性や理性、意志を磨くという役割も期待されている。そこで、2006年調査に比べ、2012年調査の「錬磨形成」読書動機合計得点が減少していることはどのように考察すべきだろうか。少なくともこの結果は、2つの可能性を示唆しているといえるだろう。1つは、今の大学生は読書以外の活動によって、自らを「錬磨形成」するようになった可能性である。もう1つは、自らを「錬磨形成」することの必要性を今の大学生は感じていない、あるいは自覚できていない可能性である。この2点については、今回得られたデータからは言及できない。個別面接や他の質問紙によって検討されるべき今後の課題といえよう。

では、「錬磨形成」読書動機合計得点とは逆に、「言語技能」読書動機合計得点は2012年調査の方が高くなっていることは、どのように考えればよいのだろうか。言語

技能読書動機は、読解力や漢字の読み書き、文章の書き方、語いなど、読書から直接的に得られる恩恵から成り立っている。他方、錬磨形成読書動機は自己の成長というやや遠回りの恩恵を求めたものになっている。つまり、読書に対して、何か壮大なものを求めるのではなく、ことばによって書かれた本を読むことで、ことばに関する力をつけようとする即効的な動機が強くなっているのだろう。

「影響触発」読書動機合計得点は2012年調査の方が低い。これには、少なくとも2つの可能性があるだろう。1つは、読書量が減っているということは、読書から興味が離れていることを意味しているのだから、その結果、読書をしている人や読書に関する情報に疎くなる、ということである。もう1つは、大学生の不読者率が増加した結果、「本を読む人」や「本を話題にする人」を目標とする機会も減少したのであろう。そうであれば、そもそも、影響を受けたり、触発されたりして読書をしようとすること自体が起きにくくなる。

③ 「数値評定項目」における比較：「読書時間帯」について

読書量が低下しているにもかかわらず、「ゆとり時間」読書や「すき間時間」読書が増加するとは考えにくい。したがって、この両者の得点が減少したことは、読書量低下が確実な現象であることを裏付けているともいえる。

大学生の経済的な理由などから、アルバイトが生活時間の多くを占めるようになると、なかなか「ゆとり時間」読書を増やすことは難しくなる。そのため、大学生が読書をするようになるためには、忙しい合間を縫って本を読む「すき間時間」読書に期待するしかない。「ちょっとした」時間に読書をするための動機付けや習慣形成が重要な研究テーマになるだろう。また、すき間時間読書のためには、本の携帯性を高めなければならない。したがって、新書や文庫本などの小型の書籍や電子書籍を活用することが、大学生に向けた今後の読書教育のための突破

口になるのではないだろうか。

(5) 今後の課題

大学生は確実に読書から離れて行っている。「読む」という行為が、紙に書かれた文字に対してしか行えなかった時代においては、大学の大衆化あるいは教養主義の崩壊として結論づけられてしまう。しかし、現在のように、紙媒体（アナログ）から電子媒体（デジタル）への過渡的状況にあっては、短絡的な考察は避けなければならない。紙媒体によるアナログな「読み」量の減少が、電子媒体におけるデジタルな「読み」量の増加によって、相殺されていることも考えられるからだ。

さらに、インターネット時代に入り、時代や社会が求める知性の形成方法や内容が、かつて紙の読書によってなされたものとは変質している可能性がある。こうした状況の捕捉は、今後の読書研究の避けられない課題だといえよう。

文献

- 大学生協連読書調査委員会編（1987）『大学生の読書生活'87年版』全国大学生生活協同組合連合会
- 大学生協連読書調査委員会編（1991）『大学生の読書生活 第3回大学生読書生活実態調査報告書』全国大学生生活協同組合連合会
- 平山祐一郎（2008）『大学生の読書状況に関する教育心理学的考察』野間教育研究所
- 大阪教育大学生涯教育計画論研究室・大阪教育大学附属図書館編集・発行（2000）『大学生の読書と電子メディア利用に関する調査研究』

受付：2014.4.3

受理：2014.6.9